

日本の住教育の実践的研究に関する課題と展望

— 北海道・アイヌ民族と沖縄・琉球の人々の住まいから —

田中宏実¹ 千賀 愛²

Challenges and issue of practical research on housing education in Japan

— Focusing on housing education of indigenous Ainu and Ryukyu people. —

Hiromi TANAKA¹, Ai SENGA²

Abstract

This article conducts a preliminary examination of previous research on the housing education practices used by indigenous people in Japan in the context of housing education adapted for children with various needs in order to clarify the achievements and identify future challenges in this area. For the purpose of this paper, we analyzed studies focusing on housing education practices of the indigenous Ainu people are available. For instance, studies indicate that learning activities included use of models, visits to the exhibition of houses in museums, social studies and comprehensive studies in elementary school. Further, very few attempts have been made to study housing education practices related to old houses in Okinawa. Home economics and social studies textbooks describe the climate and culture of Okinawa. However, as there is limited literature on the subject of housing education in Ryukyu in Okinawa, this could be a theme for future research.

1. はじめに

日本の住まいに関する教育「住教育」は、これまで建築・都市計画・教育・造園・自然・市民活動・美術活動などの多様な分野からのアプローチが行われてきた。特に教育の現場においては、家庭科・生活科・総合的な学習の時間、社会科などの分野で取り組みが見られる。筆者らは先の研究で、住教育のカリキュラム開発を行うための予備的検討として、デューイ実験学校の低学年に相当するグループの「住まい」に関する教育実践の検討を行った(千賀・田中 2017)。そこでわかったことはシカゴ大学附属校であったデューイ実験学校(1896-1904)で取り組まれていた住まいに関わる教育活動が、地理や歴史、衣食住に関連付けた実践を行っており、日本における家庭科や社会科などの内容を含むものであったこと、また年齢の違う子ども達が共に取り組める教育内容であったことが示された。筆者らは先の研究を通して、住まいに関わる教育について、北海道のアイヌ民族の住まいや沖縄の琉球の人々の暮らしを題

所属:

¹ 藤女子大学人間生活学部人間生活学科

² 北海道教育大学札幌校特別ニーズ教育学研究室

¹ Department of Human Life Studies Faculty Human Life Sciences Fuji Women's University

² Laboratory of Special Needs Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

材にすることは、年間を通して気候変動がある日本の住まいを学ぶ際には有益な対象になる可能性があると考えた。そこで今後さらに実践的な研究を深めるべく、これまで日本の子どものための住教育においてどのような取り組みや研究がおこなわれてきたのかを知ることが必要であると考えた。

本研究では、まず日本の先住民族である北海道のアイヌ民族および沖縄・琉球の住教育について注目することにした。先住民の住居はその土地古来の気候風土と密接に関わるのと同時に、住居について学ぶだけではなく自分たちの歴史と文化をも学ぶ題材となりうる。小学校においては、家庭科・社会科・美術などと関連する授業として展開できる可能性を持っていると考える。

以上のことから本研究では、住教育の実践的研究へむけて北海道・アイヌ民族と沖縄・琉球の人々の住まいについて調べ、これまでの研究の到達点とこれからの検討課題を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

調査は2016年9月～11月に実施した。国内の先住民の住まいに関する教育の先行研究を調査するにあたって、文献検索エンジン「CiNii」を用いた。日本の先住民族の住まいとして、北海道・アイヌ民族と沖縄・琉球の人々の住まいの住まいに関する教育に関わる文献を探すこととした。そこで検索条件を「アイヌ」「沖縄」に関連するものを目的とし、「住まい」「教育」などのキーワードを用いた検索をした。さらに著者名検索などをおこない抽出できた文献17件を表1に示す。本稿では表1に示した文献を中心に課題について考察する。

表1 北海道・アイヌと沖縄・琉球の住まいに関する教育の文献一覧

カテゴリー	発表年	文 献 名
アイヌ・住	2003	アイヌ民族をはじめとした人権・平和学習―芦別小学校の自主編成
	2005	小学校の授業 4年 アイヌの人たちの生活
	2009	小学校・総合/学習発表会 ピリカコタンで“サザエさん”を踊ろう
	2009	郷童(さとわらべ)(17)空き教室にアイヌ住居
	2011	北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その1 北方先住民族住居を用いた教材キットの開発
	2011	北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その2 ナセの温熱環境の推定と教育プログラムへの応用
	2012	北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その3～2011年度活動報告～
	2013	北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その4～2012年度活動報告～
	2013	博物館におけるアイヌ民族に関する学習―野外民族博物館リトルワールドを中心に―
沖縄・住	1982	地域性を考慮した住居領域の指導―小学校家庭科の場合―
	1983	「沖縄の住まい」を題材とした住居の指導
	1985	小学校家庭科の住まい領域に関する指導方法
	1995	高校生のための住居実習教材の開発(2)―住居の機能―
	1996	高校生のための住居実習教材の開発(3)―住生活の設計―
	1997	高校生のための住居実習教材の開発(4)―住居の衛生と安全―
	2010	九州・沖縄の「生活課題」「生活文化」にかかわる家庭科の授業研究(第3報):「生活課題」と「地域再生」として扱われた学習内容の検討
	2014	《技術・家庭科(家庭分野)生活者として家庭生活の向上を図る授業づくり:対話を通して学ぶ「住まい」の学習指導

3. アイヌ民族の住まいに関する教育研究

アイヌに関わる項目を検索条件「アイヌ・住・教育」で検索すると、103件の文献が抽出できた。検索できた文献の多くは住教育の内容を含むものではなかったが表1にあるようなアイヌの住まいに関わる文献の抽出ができたので次にその内容について検討する。

(1) アイヌ民族に関わる住教育研究・実践の内容と傾向

岡本(2009)「郷童(さとわらべ)(17)空き教室にアイヌ住居」では末広小学校の空き教室に作られたチセにおける教育活動の様子を報告している。卒業までに、アイヌの遊び、うた踊り、サケ漁、料理、アイヌ語、歴史など卒業までに総計100時間をつかってアイヌの文化に触れる。チセの中でアイヌの話を生徒が聞く様子や文化を学ぶ体験活動の様子が写真をもとに示されていた。しかし住教育に特化した報告は見られなかった。

西澤ら(2011~2013)は、地球のエネルギー問題に対応すべく、先住民の暮らしや住まいに着目し、環境問題について考える教材開発のため、アイヌ民族の住居「チセ」に関する教育の継続研究を行った。まず第1報として、瀬川(2011)の実践「北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その1」では、文献だけではわからない住居の構造を知るために、北海道内にある復元されたチセの現地調査から特徴を確認し、模擬授業用の教材キットをつくった。さらに実際に参加者をあつめ3種類の模型の作成をした。参加者の感想などから、模型をつくるさいの垂木の数と結ぶ際の困難点などの教材づくりへむけての課題が見えたことが明らかとなった。続いて、森(2011)らの「北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その2 チセの温熱環境の推定と教育プログラムへの応用」では、チセからはじまる北海道の暖房史を伝える教育プログラムの開発のための準備として、チセの温熱環境の推定を行う解析モデルを作成した。結果、チセの室内環境は冬季とても寒くなるが、生活する上での様々な工夫を用いることにより、夜間の温度維持などをおこない生活しており、それらが寒冷地ならではの暖房設備の開発の技術史につながっているとのコメントが見られた。さらに西澤(2011)の「北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その3 2011年度活動報告」によると、実際に筆者らの本務校(釧路工業高等専門学校)において教員と学生が半年以上かけ実物のチセを復元し、教育・研究活動に活用している様子が報告された。また第一報で報告のあった教材を実際の小中学生への教育に活用した例が報告され、参加者が教材を楽しむことができたこと、さらにチセを学ぶ上での理解につながったかどうか、また教材としての課題点なども述べられた。実際に復元されたチセで温熱環境調査を行い、暮らしをする上での困難や、工夫に関する考察が述べられていた。西澤(2013)の「北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その4 2012年度活動報告」では、一連の研究教育活動の総括がなされた。教材キットの課題と改良についての報告、復元したチセの課題と改修に関する報告などがなされた。さらに今後の研究活動の課題として、教材キットの普及への課題、越冬のために使用したトイチセの建設と比較研究への方向性が示された。

稲村(2013)の「博物館におけるアイヌ民族に関する学習：野外民族博物館リトルワールドを中心に」では、愛知県犬山市にある野外民族博物館リトルワールドに展示されている3棟のチセからなるコタン(アイヌの集落)での活動や役割について述べている。リトルワールドは小・中学生の遠足のスポットとなっており、多くの展示がある中で、アイヌの展示は無視され、注目されることが少ない、注目されるためには事前学習などが必要になるが、引率の教員などの関心も高いとは言えず課題となっていることが報告されている。ただアイヌ民族の歴史文化を教えるのではなく、それ以前に子どもたちの関心を喚起するために、文化の多様性や面白さ、楽しさを体験させることが重要であると述べている。リトルワールド内においても、ほかの展示には食べものや衣裳装着体験があるのにアイヌの展示にはないので改善していくべきだとしている。

以上のことから、アイヌに関する住教育の効果的な点としては、実物の模型や復元されたチセなどを通じ住まい体験をすることで得られる学習効果があること。また家の仕組み等の住まいの知識だけでは

なく、衣食住や歴史、環境問題などの多様な文化を学ぶことで学習効果が期待できること。また文献や実践研究の数が非常に少ないということがわかった。

(2) アイヌに関わる幼児・小学校教育関連

「アイヌ・小学校」で検索すると21件の文献を検索できた。そのうち多くは住教育とは関わりのないものであった。内容としては、国語、多文化、人権、社会科・歴史、社会・副読本、音楽、生活科、総合などに関連する文献が見られた。本論ではその中でも住まいと関連する内容の記載があった3件の文献をとりあげ検討する。

大谷(2003)の「アイヌ民族をはじめとした人権・平和学習——芦別小学校の自主編成」では、ここでは芦別小学校において全学年で取り組んだ自主編成カリキュラムの人権・平和学習について報告されている。1・2年(読み聞かせ)、3年(アイヌ文化)、4年(アイヌ文化)、5年(アイヌの歴史)、6年(アイヌの歴史・人権)の全学年での指導計画があるとの記載が見られた。住まいの学習に関しては、3年生の指導計画に衣食住の項目が見られる。また第4学年の指導計画の中には、アイヌの文化の単元で取り扱われる内容の中に、衣食住の項目と、現在のアイヌ民族の生活に関して、チセに住み、狩猟採集生活をしていないとの項目が見られた。しかしそれ以上の詳しい内容の記載がないため、取り組みの全体とその学習効果を探ることができなかった。

千葉(2005)の「小学校の授業 4年 アイヌの人たちの生活」では、標茶の小学校における小学校4年生の実践について報告がなされている。授業計画の狙いとして、標茶にアイヌの人がくらしていたという地域の歴史を知る。アイヌの人の生活の様子や自然に対する考え方などを学習しアイヌの人がどういう人かを知る。現代のアイヌの人たちの生き方について知る。ということが掲げられている。学習内容としては、ムックリを聞き民話の読み聞かせを聞く、アイヌ語の地名と生活の関わりとらえる、資料をもとにアイヌの人の生活を知る、アイヌの自然観からアイヌの人たちはどういう人かとらえる、同化政策と現代のアイヌの人の生き方、感動文・テストという内容になっている。住まいの学習に関しては、使用した資料の中にあつたチセの写真を見て、生徒は「ぼろっちい」と思っていたが、チセの省エネ効果などについて知り関心をもったとの記載が見られた。また授業の最後の感想の中で、生徒から「チセの中が知りたい」との感想が得られたとの報告が見られた。アイヌの住まいが子どもの学習意欲や関心を引き出す可能性があることが示されている。

佐藤(2009)の「小学校・総合／学習発表会 ピリカコタンで“サザエさん”を踊ろう」では、札幌市の小学校の4年生の実践について報告している。筆者はこれまでのアイヌの学習の課題として、現在ある副読本を用いたアイヌ文化の教育では表層的な学習になってしまうと考えており、筆者が行う取り組みに関しては、社会科や図工、道徳、総合的な学習の時間の中で多面的にアイヌ文化を学ぶことを柱として取り組みたいとしている。実際に取り組みでは、社会科見学で見学したチセが火事で燃えてしまったことをきっかけに、子どもたちのアイヌ文化を知っていこうとする意欲を育み、アイヌの人々との交流やサザエさんのアイヌ語の歌詞の歌をうたう一連の活動などを通して、自然な形で文化や歴史の学習へと展開実践されている様子が報告されていた。内容は一連の活動の途中までの報告であり、全学年での学びへと展開させていく方向性が述べられており、さらに発展的に展開している可能性がある。

以上の3件の文献の考察からみえてきたことは、主に小学校3、4年生での取り組みとなっている。副読本などの活用だけではとどまらない全学年の系統的展開が必要であること、住まいに関わる授業は関心を引き出しやすいこと、また復元展示のアイヌの住まい(チセ)が授業で活用するのに有効であることなどがわかった。小学校3-4年生の実践が行われた背景には、教育課程上の位置付けが関連していると考えられる。平成23年度から実施された学習指導要領の社会科では、第3学年及び第4学年の理解に関する目標が「地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動」さらに「地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにする」とされた。小学校3-4年生の社会科の目標がまとめて示されたことで、「学校や地域の実態により密着した特色ある社会科の学習が弾力的に進めることができるようにする」こ

とを意図し、身近な地域に「古くから残る建造物」が内容に加わった。平成30年から全面実施される新学習指導要領に向けて平成28年8月に示された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（第2部）の議論においても、小学校3～4年生で「地理的環境と人々の生活」の領域のなかで「身近な地域や市、県の様子」を学び、「歴史と人々の生活」で「昔の道具と暮らし」を扱うなど、住まいに関する内容が提起されている。

（3）アイヌ民族に関わるその他の文献に関して

建築や小学校のアイヌの住まいに関する教育以外の文献に関しては以下のような結果が得られた。「アイヌ・幼児」に関しては3件が表示されたが1件のみ教育関連で、他は関連が薄いものであった。得られた1件の文献は、出利葉（2015）らの「幼児の学びにおける博物館プログラムの活用：異文化環境体験プログラムに着目して」であったが、内容は子どもを対象とした体験型展示（ハンズ・オン企画）に関するものであり、狩猟に関する展示における幼児の学びについて、北海道開拓記念館とボストン子ども博物館との比較研究をしており、結論として体験型展示を幼児が楽しむことを通して、アイヌの生活や文化環境に親しむことができるという点において有効な学びになると結論付けている。内容は住まいに関連するものではなかったが、住教育、アイヌ関連の教育に関しては幼児の学びまで検討されることがほとんどないので貴重な示唆をうることができる研究論文であるといえる。

「アイヌ・家庭科」に関しては2件の文献を検索できたが、内容に関しては食生活と文化伝承に関わる論文であり、住まいに関する内容はみられなかった。「アイヌ・社会科」に関しては86件の文献が抽出できたが、博物館や副読本に関する研究や、先に考察した論文の他には住まいに関わる文献を見つけることができなかった。

以上のことから幼児向けのアイヌに関する教育、家庭科でのアイヌに関する文献がほとんどないことがわかった。またアイヌの社会科に関する文献は多数あるが、内容は住まいに関連するものではないこともわかった。

4. 沖縄の住まいに関する教育研究

沖縄・琉球の住教育に関する文献を検索し考察する。「沖縄・住・教育」では205件の文献を抽出したが、住教育に関連のないものが多くあるため、さらにキーワードを絞り検索をすることにした。「沖縄・住まい・教育」では8件の文献を抽出した。その中で住教育に関連する論文としては、取り上げることができるのが1件のみあった。鈴木（1983）の「「沖縄の住まい」を題材とした住居の指導」という文献からは、沖縄の住まいの発展について大学生を対象にアンケート調査をし、知識や理解について明らかにした。調査対象者は住まいに関して断片的な理解をしているため、系統的な学習が必要であることが述べられている。他教科（社会科・理科）との関連のなかで授業をすることの意義について触れ、小学校4年生の「さまざまな土地の暮らし」という単元のなかに出てくる沖縄の気候と住まいの例、5年生の国土の特色、6年生の理科のなかに出てくる四季の変化と太陽の動きなどの部分と関連させながら授業を展開することが重要であることが述べられている。さらに住居模型を用いて指導すること、実験を行うことが重要な手段となりうるとの提案があった。それらをもとに台風対策や暑さ対策などを中心に沖縄の住まいを題材とした指導案を示している。しかしここでは現代に近い住居に居住してきた学生や生徒の住まいについて触れられており、琉球とよばれた昔の沖縄の民家についてふれる項目などは見受けられなかった。

「沖縄・住居・教育」では92件の文献を検索することができた。多くは住教育と関連のない文献であったが、その中には、桑畑（2010）らの「九州・沖縄の「生活課題」「生活文化」にかかわる家庭科の授業研究（第3報）：「生活課題」と「地域再生」として扱われた学習内容の検討」があった。この研究は第1報～第4報まであり、とくに住居に関連した内容を記載しているのが第3報で、この研究では、熊本・鹿児島・大分・宮崎・沖縄の五県で1994年～2004年に報告された家庭科の授業実践事例を収集し、「地

域」に関わる授業が展開された事例を分析したものである。「地域」を変えていこう、再生していこうとする視点を含むものが「住居」の分野で多く取り扱われる傾向があることがわかった。さらに詳細をみると、バリアフリーや住みやすさなどを、生徒が学校を点検する活動などをフィールドとして実践的に学習している例がみられた。ここでは沖縄・琉球の古い住まい「民家」についての記述はみられなかった。さらに「沖縄・家庭科・住」で検索をかけ2件抽出したが、先ほどののべた2件の文献と重複する論文であった。さらに「沖縄・社会科・住」では住教育に関連する文献を抽出することができなかった。

沖縄・琉球の古い住宅「民家」に関連する住まい教育の文献を見つけるためさらに検索を進めた。「沖縄・民家・教育」に関しては11件で先に述べた博物館に関わる論文2件の他に、民家の空間構成や景観に関わる文献が見られたが、住教育に関わる文献を見いだすことができなかった。「琉球・住まい・教育」で検索すると11件の文献を検索できた。そのうち3件は関連論文で、1件に関してはすでに先で検討した文献であり、残り2件についてここで考察する。鈴木(1986)「小学校家庭科の住まい領域に関する指導方法」では、小学校を対象に家庭科教育のなかにおける住まいに関して模型や実験をとおした指導方法について提案している。しかし沖縄、琉球における民家についての記述はほぼ見られなかった。また筆者の鈴木はこれ以外にも、住まいに関する住教育関連の研究を主に家庭科の領域と関連させて考察をすすめており、著者検索からさらに調査を進めると関連論文として古い沖縄の住まいに関わる論文内容を含む4件の文献を見つけることができた。鈴木(1982)「地域性を考慮した住居領域の指導—小学校家庭科の場合—」では沖縄の小学校の家庭科における住まいの事例について検討し、教科書どおりには教えられない独自の地域性をもつ沖縄独自の住教育を検討していく必要性について述べている。さらに鈴木(1995)「高校生のための住居実習教材の開発(2)—住居の機能—」、鈴木(1996)「高校生のための住居実習教材の開発(3)—住生活の設計—」、鈴木(1997)「高校生のための住居実習教材の開発(4)—住居の衛生と安全—」において、沖縄の古い住まいに関する高校生向けの教材開発について検討されていた。このように鈴木により沖縄の住教育についての検討はなされているが、全体をとおして非常に数が少なく、近年のものがあまりないことがわかったこと、筆者が上げている課題等が解決されているのか、さらに今後考察を進める必要がある。

続けて、「琉球・住まい・教育」で検索できたもう1件について述べる。東(2014)は「《技術・家庭科(家庭分野)》生活者として家庭生活の向上を図る授業づくり：対話を通して学ぶ「住まい」の学習指導」において、琉球大学教育学部附属中学校における実践をとおして、住まいに関する学習指導について検討している。住まいの領域のなかでも、とくに安全・安心な住まいについての学習を検討し、協調学習の在り方について考えている。結果として、住まいへの関心が高まったと結論付けている。この文献の中にも、沖縄・琉球の古い住まいに関する住教育の内容に関する項目は見られなかった。

沖縄・琉球の古い民家の展示などがある博物館に関連する論文において住教育に関連する文献を検索するため、「沖縄・博物館・住」で検索をかけ33件を抽出した。そのうち住教育関連は、多良間(1999)の「宜野湾市立博物館における民家の復元と展示について」、上江田(1999)の「新城古集落民家及び集落の復元に関する研究：(その2)集落復元の具体的内容及び展示物としての役割」があった。これらの文献では、博物館展示のためにおこなった沖縄・琉球の古い民家の復元に関して、建物の計画や博物館の展示への課題などが書かれており、住教育と直接関連しない内容であった。

以上のことから、沖縄・琉球の古い住まいに関する住教育関連の実践・研究について蓄積が少ないことがわかった。日本全国の様々な教育・実践の現場では、沖縄の住まいや文化は、それぞれの地域の住まいとの比較対象等として取り上げることがよくある。沖縄・琉球の古い住まい「民家」を活用した住教育は今後さらに実践的研究が必要なのではないかと考える。実際の教育現場や民家が現存する場所等では、住教育に関わる実践的取り組みがなされている可能性もある。さらに調査を進め、実態を把握する必要がある。

5. まとめ

本論文では、日本の先住民族の住まいとして北海道のアイヌ民族と沖縄・琉球の古い住まいについて住教育関連文献を調べ検討した。最後にそれらの内容を総合的に考察し、今後実践的研究をする上での課題を明らかにする。

(1) 北海道のアイヌ民族と沖縄・琉球の住まいに関する文献の傾向

本論では、北海道のアイヌ民族と沖縄・琉球の住まいに関する教育の先行実践・研究について検討してきたが、住教育関連の文献数が非常に少なく、今後さまざまな方面から研究や実践をすすめていく必要がある。特に沖縄・琉球の古い住まいに関する教育の文献はほとんど見られなかったため、今後研究・実践を行っていく必要があることがわかった。北海道のアイヌ民族の住まいに関しては、教育学の関係者からアプローチしている文献が多く、建築学分野からアプローチする文献は少なかった。研究の著者は、実際の現場の教師からの報告と建築学や教育学の研究者からの報告が見られた。

(2) 住まいに関する教育の対象学年について

北海道のアイヌ民族と沖縄・琉球の住まいに関する教育の対象学年や年齢に関しては、抽出できた文献においては、小学校3年生や4年生での取り組みと、全学年的に取り組んでいる小学校の実践報告があった。また、幼児に関する住教育関連の報告は見られなかった。住まいに関する教育ではないが、幼児のアイヌの文化に関する博物館での体験型教育に関する文献において、幼児が体験を通してアイヌの文化について学ぶことができる可能性について示されていた。幼児に関する住教育のあり方については今後の研究課題である。建築学からのアプローチでは、高校生や、高等専門学校の学生への住まいの教育実践や開発方法に関する示唆も示されていた。

(3) 使用していた教材や場所等について

教育方法としては、模型製作をするところ、学校内にチセを復元し教育に活用しているもの、博物館に展示されている住居展示を活用するもの、資料などを用いて写真などを教育に活用しているものがあった。また全学年的に取り組んでいた小学校においては、音楽や食文化の体験などと関連付け住まいについての理解を深めていた。復元展示のある場所へ訪問してお話を聞く、アイヌの方を招いて話してもらうなどの方法がとられている場合もあった。

(4) 今後の課題

本研究では、北海道のアイヌ民族と沖縄・琉球にくらす人々の住まいに関する住教育をすすめていくための課題として次のことがわかった。①模型や博物館展示、もしくは教育施設内に復元させるなど、実物の住まいを活用した住教育のカリキュラムを開発すること、②住まいだけでなく、歴史や文化等も含めて、住まいに関して総合的な学習活動を組織すること、③子どもが自ら課題に気づき探求していく場面を授業の中で設定する、④教育の現場においては家庭科のみ、社会科のみなどの単一教科で教えることは困難であり、教科横断的な内容を形成すること、⑤3年生、4年生だけの学習とするのではなく、幼児や低学年や中学生なども含め、系統的に学んでいくことで効果が表れる学習にすることが必要である。さらに、これらの課題に共通する観点として、近年は障害を含む様々な特性・困難のある子どもが一般の学習活動に参加するインクルーシブ教育が進展しており、「全ての学校や学級に発達障害を含めた障害等のある子どもが在籍する可能性がある」ことが指摘されている（中教審特別支援教育部会2016）。このため住教育においても異年齢や多様な能力・ニーズのある子どもが参加できるカリキュラムや実践を開発していく必要があるだろう。そのことは、規定の選択肢を用意した狭義の「問題解決」や「課題解決」の枠組みによる活動ではなく、失敗や試行錯誤といった子ども自身が問題に直面し、時間をかけて互いに協力しながら解決に向かう場面を想定しておくことを示唆している。

以上の検証から、北海道・アイヌ民族と沖縄・琉球の人々の住まい研究の到達点と課題を見いだすことができた。今後は、具体的な住まいの学習活動を試行して、多様なニーズのある子どもが参加できる活動を検討していきたいと考えている。

参考・引用文献

- 東 町子・國吉真哉 (2014) 「《技術・家庭科(家庭分野)生活者として家庭生活の向上を図る授業づくり：対話を通して学ぶ「住まい」の学習指導》研究紀要=University of the Ryukyus Junior High School(26), 121-132.
- 稲村哲也 (2013) 「博物館におけるアイヌ民族に関する学習 — 野外民族博物館リトルワールドを中心に —」日本社会教育学会紀要(49), 33-35.
- 上江田常実, 福島駿介, 多良間利絵子 (1999) 「新城古集落民家及び集落の復元に関する研究：(その2) 集落復元の具体的内容及び展示物としての役割」日本建築学会 学術講演梗概集, E-2, 建築計画II, 69-70.
- 大谷佳子, 日比野裕司 (2003) 「アイヌ民族をはじめとした人権・平和学習 — 芦別小学校の自主編成」解放教育 33(5), 90-95.
- 岡本 央 (2009) 「郷童(さとわらべ) (17) 空き教室にアイヌ住居を復元！」食農教育 (68), 72-75.
- 桑畑美沙子, 浅井玲子, 伊波富久美, 今村桂子, 國吉真哉, 久保加津代, 倉元綾子, 立山ちづ子, 福原美江, 宮瀬美津子 (2010) 「九州・沖縄の「生活課題」「生活文化」にかかわる家庭科の授業研究(第3報) — 「生活課題」と「地域再生」として扱われた学習内容の検討 —」日本家庭科教育学会誌 52(4), 263-271.
- 佐藤広也 (2009) 「小学校・総合/学習発表会 ビリカコタンで“サザエさん”を踊ろう」歴史地理教育 (742), 48-55, 1.
- 鈴木雅夫(1982), 「地域性を考慮した住居領域の指導 — 小学校家庭科の場合 —」, 琉球大学教育学部紀要 第二部 (26), 253-261.
- 鈴木雅夫, 西島本あゆみ, 大城昭子 (1983) 「「沖縄の住まい」を題材とした住居の指導」, 琉球大学教育学部紀要 第二部 (27), 427-446.
- 鈴木雅夫 (1985) 「小学校家庭科の住まい領域に関する指導方法」, 琉球大学教育学部紀要 第二部 (29), 301-324.
- 鈴木雅夫(1995)「高校生のための住居実習教材の開発(2) — 住居の機能 —」, 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部 (48), 347-354.
- 鈴木雅夫(1996)「高校生のための住居実習教材の開発(3) — 住生活の設計 —」, 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部 (50), 237-245.
- 鈴木雅夫 (1997) 「高校生のための住居実習教材の開発(4) — 住居の衛生と安全 —」, 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部 (52), 161-167.
- 千賀 愛, 田中宏実 (2017) 「デューイ実験学校のグループⅣとⅤにおける「住まい」に関する教育実践：小学校のカリキュラム開発のための予備的検討」北海道教育大学紀要(教育科学編), 第67巻第2号(印刷中).
- 瀧川大地, 西澤岳夫, 森 太郎, 川畑遼太 (2011) 「北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その1 北方先住民族住居を用いた教材キットの開発」日本建築学会北海道支部研究報告集 (84), 523-526.
- 多良間利絵子, 福島駿介, 上江田常実 (1999) 「宜野湾市立博物館における民家の復元と展示について」, 日本建築学会 学術講演梗概集, E-2, 建築計画II, 67-68.
- 千葉誠治 (2005) 「小学校の授業 4年 アイヌの人たちの生活」歴史地理教育 (679), 48-51.
- 出利葉浩司, 中西さやか(2015) 「幼児の学びにおける博物館プログラムの活用 — 異文化環境体験プログラムに着目して —」名寄市立大学紀要 第9巻, 83-90.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(2016) 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(報告)」. 平成28年8月26日.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会特別支援教育部会(2016) 「特別支援教育部会における審議のとりまとめ(報告)」平成28年8月26日.
- 西澤岳夫, 瀧川大地, 森 太郎, 岩田潤也, 小川晃平(2012) 「北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その3～2011年度活動報告～」日本建築学会北海道支部研究報告集 (85), 495-498.
- 西澤岳夫, 瀧川大地, 森 太郎(2013) 「北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 その4～2012年度活動報告～」日本建築学会北海道支部研究報告集 (86), 425-428.
- 森 太郎, 川端遼太, 西澤岳夫, 瀧川大地(2011) 「北方先住民族住居を用いた実践的教育プログラムの開発 そ

の2 「チセの温熱環境の推定と教育プログラムへの応用」日本建築学会北海道支部研究報告集 (84), 281-284.